

浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—

第 106 回 (2017. 11. 7) の要旨

拝読文(『真宗聖典』55～56 頁)

疑網を決断して、慧、心に由りて出ず。仏の教法において該羅して外なし。智慧、大海のごとし。三昧、山王のごとし。慧光、明浄にして日月に超踰せり。清白の法、具足し円満すること、猶し雪山のごとし、もろもろの功德を照らすこと等一にして浄きがゆえに。猶し大地のごとし、浄穢・好悪、異心なきがゆえに。猶し浄水のごとし、塵労もろもろの垢染を洗除するがゆえに。猶し火王のごとし、一切の煩惱の薪を焼滅するがゆえに。猶し大風のごとし、もろもろの世界に行じて障碍なきがゆえに。猶し虚空のごとし、一切の有において所着なきがゆえに。猶し蓮華のごとし、もろもろの世間において汚染なきがゆえに。猶し大乘のごとし、群萌を運載して生死を出だすがゆえに。猶し重雲のごとし、大法の雷を震いて未覚を覚すがゆえに。猶し大雨のごとし、甘露の法を雨らして衆生を潤すがゆえに。金剛山のごとし、衆魔外道動ずること能わざるがゆえに。梵天王のごとし、もろもろの善法において最上首なるがゆえに。尼拘類樹のごとし、普く一切を覆うがゆえに。優曇鉢華のごとし、希有にして遇い難きがゆえに。金翅鳥のごとし、外道を威伏するがゆえに。もろもろの遊禽のごとし、蔵積するところなきがゆえに。猶し牛王のごとし、能く勝つものなきがゆえに。猶し象王のごとし、善く調伏するがゆえに。師子王のごとし、畏るるところなきがゆえに。曠きこと虚空のごとし、大慈等しきがゆえに。嫉心を摧滅せり、勝るを忌まざるがゆえに。専ら法を樂求して心に厭足なし。常に広説を欲い、志疲倦なし。法鼓を撃き、法幢を建て、慧日を曜かし、痴闇を除く。六和敬を修し常に法施を行ず。志勇精進にして、心、退弱せず。世の燈明と為りて最勝の福田なり。常に導師と為りて等しく憎愛なし。

「疑網を決断して、慧、心に由りて出ず」。疑いの網をきっぱりと断ずるということですが、「横截五悪趣」という言葉が『無量寿経』にあります。横ざまに五悪趣を截る。悪趣は悪道ともいいますが、六道流転つまり流転する生活、無明によって煩惱を起こして流転するという。そういう我われが迷って生きているあり方を悪趣というわけです。その流転の生活を横ざまに截ることが『無量寿経』に説かれています。

この「横ざま」ということですが、親鸞聖人は「横超断四流」(『聖典』235 頁)という善導大師の言葉を「信巻」に取り上げています。真実信心を得ることによって我われに成り立つ一つの功德、それが「横超断四流」という功德なのだ。しかし真実信心を得るといっても、それは如来回向の信心です。つまり、如来のはたらきをいただくということにおいて自分に信心が成り立つ。そうしていただいた信心がもつ功德として「横超断四流」という功德があるのだということです。ところが我われは、断ずるのは自分だと思ふのです。それを親鸞聖人は「堅」といっていますね。堅の菩提心とは、自力の菩提心です。自分で覚りを開こうともがく。それに対して「横ざま」とは本願力を表します。「願力不思議の信心は 大菩提心なりければ」(『同』488 頁)という御和讃がありますが、願力不思議の信心は大菩提心であると。それは我われの身が菩提心を自分で起こすのではなく、願力によって我われに本願力の功德が与えられる。そのことは大菩提心という意味をもつのだ。大菩提心とは、必ず仏になるということ。本願のはたらきを信ずるとは、本願力の摂取のはたらきの中に身をあずけ

るということです。そのことが成り立つならば、それはもう本願自身が大功德をもって菩提心を成就する。だから、我われは純粹にその本願力を信ずるということ一つでこの世を渡って行けるのだというわけです。

我われの生活は実に煩惱まみれです。それこそ泥田にもがくカエルのように、我われは煩惱の泥田を生きている。しかし、煩惱の泥田と別に本願力があるのではないのです。泥田を生きているところに本願力のはたらきを感じ取る。本願力のはたらきを感じ取れば、この泥田の中にあるということと、本願力が与えようとする光明の世界とは矛盾しない。こういうことを親鸞聖人は、たとえば現生十種の利益（『同』240頁）ということに積極的に仰るのです。

我われは他力を信ずるというと、イージーゴーイングで何もしなくてもひとりでにいけるかのようになんて教えを墮落的に考えてしまいますが、そういうことではないのです。煩惱にまみれた生活には矛盾もあり、苦悩も起り、悪戦苦闘するということもある。けれども、その悪戦苦闘のただ中に光に出遇うという信仰の事実があるのだ。すなわち、信心のはたらきの事実というものをいただいて、喜んでいくことができる。ところが、その喜んでいくためのエネルギーになるのは苦悩の命なのです。つまり、苦悩の命を縁として光をいただくわけです。親鸞聖人が仰る信心の行者とは、こういう生活を生きる者のことをいうのです。このような展望を含めて親鸞聖人は、我らは愚かな凡夫であるけれども、この凡夫のところに大悲が来るのだと、本願力がはたらいて来るのだと仰るのでしょう。

本文に戻れば、「疑網を決断して」とは疑いの網を決定して断絶するということですが、親鸞聖人は「横超」（『同』237・424頁）ということに仰っています。要するに如来の本願力のはたらきによって疑いが晴らされるというわけです。

「行信」ということを仰いますね、親鸞聖人は。「総序」（『教行信証』）では「疑いを除き証を獲しむる真理なり」と（『同』149頁）と言っていますが、行には不思議なはたらきといいますが、行自身が衆生にはたらいて智慧を恵むという、そういうはたらきをする。それをいただくのが信心であって、そのいただいた信心がまた、信心自身が我われの疑いを晴らしていく。「疑いを除き証を獲しむる真理なり」と、信心がそういうはたらきをするのだということを親鸞聖人は仰っているわけです。信心を得るとということと、疑いが晴れるということとは別ではないのです。

「智慧、大海のごとし」。智慧という言葉が親鸞聖人は名号について、たとえば仏の名号が智慧という意味をもつというような使い方もされますが、我われに起こる信心が智慧という意味をもつ、信心の智慧という言い方もしておられます。一般的に言われるところの知恵は、処世の知恵とか人生の知恵とか、いわゆるこの世を乗りこえて行くという方法論に関わる知恵ですが、仏教の智慧は、そういうこの世の知恵とは質が違って、この世の迷いを翻すようなはたらきをもった智慧なのです。中国語では、漢字で菩提と書いて智慧と翻訳しますが、菩提とは本来「目覚め」という意味を持った言葉ですから、智慧は迷っている事実から目覚めるということ、迷いに気付くということです。しかし、迷いの事実を本当に知るということは凡夫にはできない。迷いの事実と言葉ではいうけれど、自分が迷っているとは思わないのが凡夫です。そこに教えが、仏陀の側から教えがきて、教えを通してどこまでも我われは迷い続ける人間であると知らされていく。それが、菩提を味わう道になる。ところが、そういう話をすると仏教というのは過程でしかないのか、究極がないのかと言われてしまう。

「悟後の修行」という言葉が禅にあります。覚ったから終わりというのではなく、覚ったところにまだ修行がある。つまり、生きているという事実は乗り越えなければならない課題が常に与えられてくるということに他なりません。ですから、迷いの自覚とは単なる過程ではなく、気付かされて歩んで行くということですが、不思議にも中国語では覚りということ、菩提ということ「^{どう}道」と翻訳しているのです。道というのは、過程ですよ。それが同時に覚りという意味をもつ。だから、覚って終わりというのではなくて、覚りから始まるというか、「他力の信心」ということも信心から始まる。信心で終わるのではないのです。そのことを曾我量深先生は、「仏教には入門はあるけれど、卒

業はないのだ」と言われた。これは迷っている側からすると意味が分かりませんが、信心に触れてみると、本願力のはたらきをいただくことと、我われが煩惱の生活をしていくこととは矛盾しながら重なっているわけです。歩んでいくという過程みただけけれど、念々に出遇いつつ生きていくということ。出遇った、それで「おしまい」ではない。出遇ったところから出発して、出遇いつつ生きていく。信心の智慧とは、何かそういうあり方を教えて下さっていると思うのです。

「智慧、大海のごとし」ということは、如来の智慧は、我われが尋ねようとしても我われの分限からは尋ねることが出来ないほど大きな智慧であるということでしょう。付言すれば、大悲が智慧という意味をもつのです。つまり、光明は智慧のかたちだと言われますが（『同』554頁）、阿弥陀の光は尽十方無碍光ですから、あらゆる世界を無碍に照らす。こういう大きさを『無量寿経』では「廣大無辺際」（『同』135頁）と説いて、そういう世界を如来の智慧はもっている。だから、如来の智慧が開く世界は大海のごとしだと。

これ以降、随分たくさん譬えが挙げられていますが、親鸞聖人も「行巻」の結びにおいて「悲願は、たとえば……」と言って、本願の名がどういふはたらきをするかという時にいろんな譬えを出しておられます。このように譬えを並べる形で功德を讃めたてるのは一つの典型的なあり方なのです。ですから『無量寿経』以外にも『華嚴経』などいろんな経典に見られます。

「猶し大乘のごとし、群萌を運載して生死を出だすがゆえに」。これまでずっと自然界の譬えが続いていましたが、ここから譬えがちよっと変わって来ます。大乘とは、大きな乗り物という意味です。

一切の衆生を載せて運んで、生死を出だす。「生死」は流転、流れ転がされていくような命、迷いの生活という意味です。単に生まれて、生きて、死んで行くというだけではない。生きていくこと自身が苦悩の命である。闇の命である。もがいてしか生きられない命である。仏教語の「生死」とは、そういう意味内容を持った言葉なのです。そして、そういう命を我われが感ずる根源は無明にあると仏陀は見出されたわけです。「生死を出だす」ということは、迷いの命を出だすといっても良いし、苦悩の命を出だすといっても良いし、煩惱で縛られているあり方から解放するといっても良いし、いろんな言い方ができるわけですが、何より、大乘とはそういう課題なのだということなのです。

「猶し重雲のごとし、大法の雷を震いて未覚を覚すがゆえに」とありますが、自然界の現象では雷ほど怖いものはないと昔は思われていたのではないかと思います。どこに落ちるか分かりませんし、そういう怖さをもっている。それが黒く重い雲、垂れ下がるような重い雲が出て、そこから稲妻とともに雷が落ちてくる。「大乘のごとし」「重雲のごとし」という、この一連の譬えのもとには如来のはたらきというか、如来の大悲のはたらきがあるわけです。それは、迷っているものを覚らせるようなものだ。稲妻とともに雷が落ちてビックリさせるように、大きな法が与えられて、それによって揺り動かされて、覚らされる。

そして次は雨です。**「猶し大雨のごとし、甘露の法を雨らして衆生を潤すがゆえに」**と。この頃の大雨はあまりに降りすぎるから被害をもたらしますが、この場合の雨の譬えは甘露の法です。たとえば我われはお腹が空いている時に与えられる食事はものすごく美味しいわけです。喉が渴いている時に与えられる水はものすごく美味しい。だから甘露という言葉は我われの飢え、とにかく喉が渴いて渴いてどうしようもない時に与えられる水の味をいうのです。文字通り甘い水ということではなく、甘い水のように感じる。それはこちらが、喉が渴いているからでしょう。そこに教えがしみとおるように入ってくる。それはあたかも甘露のようであると。

「世の燈明と為りて最勝の福田なり」。「福田」とは、ある時お釈迦さまが頭陀をしておられて、忙しく田畑を耕している人の側を通って行かれた。その時に、お釈迦さまのことを良く知らない人が、お前は偉そうに歩いているけれど、わし等は働いているのだと。お前は何もしないのかという難癖を付けてきた。それに対してお釈迦さまは、我は衆生の福田を耕すと答えたという、そういう物語があ

るのです。労働して田んぼや畑で作物を作るだけが働くということではないと。私は精神的な喜びを与えるべく、衆生の心の田んぼを耕すのだと。つまり心の田んぼを耕すことを、福田を耕すというわけです。

そして「常に導師と為りて等しく憎愛なし」とあります。導師とは本来、世の人びとを仏法に導く仕事をする人を導師といったのです。ですから、如来のはたらきにおいては、常に世の人びとを仏法に導いて、平等に、憎しみとか愛着とかいうことはない。こういう言葉は良い言葉ですよね。でも、我われはそうはなれないわけです。貪愛瞋憎といいます。貪りやら、欲やらが煩惱として起こって憎愛が生ずる。憎しみが起こったり、愛着が起こったりする。しかし、なれないけれども、我われが「常に導師と為りて等しく憎愛なし」というあり方が本当だと感じる限りにおいて、それに背いてしか生きられない自分を照らし出される。だからといって反省して、憎愛を止めて、導師となっていくことは出来ないけれども、その照らし出された自分の生き様が本当のあり方に背いているということを知らされつつ、しかし大悲の光を恵まれてかたじけないと感じて生きていけるという、何かそういうあり方をここでは教えているのだらうと思います。

文責：法隆誠幸（親鸞仏教センター嘱託研究員）